

か、おもむきながら現物を手にすること  
 口、ハなか、カ、もちろん、これについ  
 口、インヅマンドでコピー本も登場し  
 ているし、中国語訳もこれまでに『馬札  
 遼回憶録』と題して顧長声（広西師範大  
 学出版社、二〇〇四・六）と鄧肇明（基督教  
 文芸出版社、二〇〇八・二）の二種類が出  
 版されているが、特に前者の訳はいわ  
 ゆる「抄訳的なものであり、誤りも多い。  
 今回、これも原書の影印本と完全な中国  
 語訳本が刊行されることになり、この分  
 野の研究者にとって有益なものである。

第一四巻に予定されている「モリソン  
 研究文献索引」は、日本の陳力衛氏の研  
 究成果を元にしたものであるが、これも  
 資料的価値は極めて高いものである。

こうしたこれまで待望久しかったモリ  
 ソン著作が文集として刊行され、しかも  
 全巻揃いで三、〇〇〇元という破格の値  
 段で発売されることは、大象出版社の英  
 断によるものであり、その心意気に拍手  
 喝采を送りたいと思う。

ただ、残念なことは、モリソンの他  
 の重要な著作、たとえば、『Dialogues

and detached sentences in the Chinese  
 language』（二八一六）『A view of China』  
 （二八一七）『西遊地球聞見略伝』（二八  
 一九）『Chinese miscellany』（二八二五）、  
 Vocabulary of the Canton dialect 広東省  
 土話字彙』（二八二八）などが今回収めら  
 れていないことである。これらは今後に  
 期待するところである。

ところで、本文集の発刊式および「モ  
 リソン 来華二〇〇周年記念国際学術シン  
 ポジウム」（北京外国語大学中国海外漢学  
 中心、香港大学図書館、澳門基金会共催）が  
 去る三月一七日から一九日にかけてマカ  
 オで開かれている。中国、台湾、香港、  
 マカオ、シンガポール、日本などから約  
 五〇名の研究者が参加したが、モリソン  
 の字典や言語研究について活発な討論が  
 行われ、参加者全員に本文集が進呈され  
 た。

日本からは、筆者を始め、沈国威、陶  
 徳民、朱鳳、陳力衛、伊伏啓子が、以下  
 のようなタイトルで発表を行った。

関於馬札遜的語法論及其翻譯觀

内田慶市

## 現代化した中国軍の全貌と兵士の人生

田辺 義明

世間には無責任な中国軍脅威論が溢れ  
 ている。店頭に並んでいるのは明日明後  
 日ならばともかく、いまにも中国の軍隊  
 が日本に攻め込んで来るようなタイトル  
 の書物が多い。しかしこの『人民解放軍』  
 はその類書ではない。著者はNHKのもの  
 と北京支局長である。

二〇〇八年北京オリンピックは中国の  
 国威発揚という効果をもたらして、ナ  
 ショナリズムと大国意識はさらに高揚し  
 た。『解放軍画報』二〇〇八年七月下半  
 月号の表紙には、聖火ランナーの写真に  
 「富国強兵」の四字がある。どこかで  
 百年前に聞いた言葉だが、いまその熟語  
 が息づいているのは中国である。この巨  
 大な軍隊を擁する中国に暮らすと、日常  
 でもテレビは軍事番組ばかり、新聞売り  
 場は軍事雑誌で溢れている。さらに歌舞

音曲の娯楽までが軍隊の「文芸工作団」  
 一色で、まったくの軍隊文化という状況  
 がある。日本で人気になった「女子十二  
 楽坊」の美女にも軍隊養成のメンバーが  
 いる。

評者は八〇年代初めに学者グループを  
 引率して上海近郊の人民公社を視察し  
 て、笑えない昔話がある。日本の社会  
 学者たちは当時のことであるから、なん  
 でも「素晴らしい」と言った。その頭上  
 を中国の殲撃六型戦闘機の一エレメン  
 ト（二機編隊）が航過した。英語のでき  
 る中国外交部の役人が「チャイナ・エア  
 フォース」と叫んでそれを指差した。  
 わが国にもジェット戦闘機があるから写  
 真を撮れ、というのである。しかしこれ  
 は当時としても旧式機で、世界水準より  
 四半世紀は遅れていた。それで終われば

訳詞創造・西方新概念の移人——馬札遜  
 の挑戦及其影響 沈国威  
 伝教士在中西文化交流中扮演的多種角色  
 ——以馬札遜和衛三畏為例 陶徳民  
 馬札遜《華英英華辭典》在日本的傳播和  
 利用 陳力衛  
 試論馬札遜《五車韻府》的編纂方法及參  
 考書 朱鳳  
 R Morrison 《通用漢言之法》 伊伏啓子

この他、昨年度同じく来華二〇〇周年  
 を記念して、モリソンの「神天聖書」が  
 影印出版（二〇〇セット限定、二、八〇  
 〇元）されているし、香港聖經公会から  
 は「モリソン来華二〇〇周年記念版 新  
 約全書——和合本修訂版（上帝版）」（二  
 〇六・二）も出版されていることも情報  
 として記しておく。

（うちだ、けいいち 関西大学）

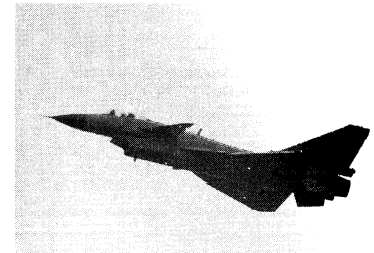
## 人民解放軍



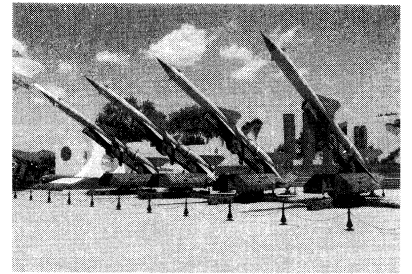
竹田純一著  
 人民解放軍

四六判 512頁  
 ビジネス社 [4200円]

よかったのだが、少しばかり物知りの日  
 本人学者が戦闘機を「フアーマー（農民）  
 だ！」と言った。役人は「いいえ空軍は  
 農民ではありません」と反駁。どちらも  
 理由が分かっていなかった。ここで日本  
 人が言ったのはソ連機のNATO識別名  
 だった。五〇年代末にソ連のMiG（ミ  
 グ）一九をライセンス生産したのが中国  
 の殲撃六型である。その後の中ソ関係悪  
 化、大災害期とプロレタリア文化大革命  
 などで、中国のイノベーションは止まっ  
 てしまった。そのとき中国は海からアメ  
 リカ、山からはソ連と四面楚歌で、毛沢  
 東は生産ラインの「三線建設」を指示し  
 て、山奥でひたすらこの殲撃六型を三〇  
 〇〇機以上も生産し続けた。かつて西側



国産殲撃—〇型戦闘機  
(珠海航空ショー・田辺撮影)



紅旗二型 (HQ-2) ミサイル  
(中国航空博物館・田辺撮影)

は、ソ連型戦闘機の正式名称を把握しておらず「NATOコード」と呼ばれる便宜識別法を使っていた。日本の新聞各社も、事情を知らずこれに従った。戦闘機 (Fighter) には「F」で始まるコード名がつけられて、MiG一九は「ファーマー」と呼ばれていたのである。ちなみに爆撃機はBで始まり、輸送機はCという具合である。「農民」と名付けられたMiG一九はまだよい方で、MiG二三「フロッガー」つまり「鞭打ち」である。その鉄のカーテンは消えてしまった

退休中)で、義母はその農業建設第八師団兵站部で殉職して「烈士廟」に祀られている。また評者は日本の月刊誌に「最新・中国航空軍事トピック」を連載している、中国軍とくに空軍の動向を観察中である。そこから本書の持つ意味と内容を吟味させて頂く。

著者の竹田氏は特派員として中国軍を八〇年代から取材して来た。中国軍というと決まって一九二七年八月一日の「南昌起義」から書き起こされるのだが、本書では八〇年代以降の「現代化」中国軍

が、「竹のカーテン」は笹の程度になって健在である。

評者は社会学者であるが、中国の「軍隊式」組織をやや内在的に考察している。岳父は新疆生産建設兵団の基層幹部(党員、

である。しかし「党」の武装力量という性格は、本書でも重ねて強調されている。これは『東方』誌の読者諸賢には述べるまでもないが、中国共産党は政治経済体制そのものだけでなく人民の安全まで保障する。共産党とその軍隊も国費で運営されるのが当然とされ、それは民主党派がほかに八つあろうと唯我独尊の政権党で、「軍隊」と「政党」の関係概念は他国とは異なる。現代の中国軍も「工農紅軍」の紐帯を引きずり、「人民解放軍」は陸軍を基幹としている。これは英語では明らかとなつて、空軍はP.L.A.R.N.A.V. (PLARNAV)で陸軍の随伴航空戦力となる。解放当時は言うまでもなく兵力は陸軍だけで、国民党からの「起義」武装決起、実際は帰順)部隊を除くと海軍・空軍はゼロだった。そこで歩兵と騎馬・駄馬部隊を、ソ連式教育で海軍と空軍に仕立て上げたという経緯がある。従前の海軍・空軍の最高幹部も、みな老紅軍すなわち陸軍歩兵出身だった。いま中国海軍の海兵隊を旧日本軍と同じく「海軍陸戦隊」というが、海軍の水兵は「陸軍海戦隊」と

自嘲するほどの陸軍国である。空軍も中央直属の第三四航空団と第一五空挺軍を除いて、陸軍の瀋陽・北京・濟南・南京・廣州・成都・蘭州という七大軍区ごとに分かれている。つまり空軍も軍区の下位にある。なお空挺軍(落下傘部隊)は空軍で、回転翼機(ヘリコプター)部隊は陸軍である。あまり重要ではない歴史にこだわらず、現状分析と割り切ったのが本書の特徴である。

表紙のキャッチには「党と国家戦略を支える二〇〇万人の実力」とあるが、欧米の調査機関によれば二〇〇万を割るというデータもある。どちらにしても世界最大の軍隊である。しかし日本の自衛隊は定員二五万一二二二人(自衛隊手帳二〇〇八「朝日新聞社」)で、人口比からすれば平和日本に対して中国が格段の軍事国家とは見えず、そのことは本書にもある。中国の軍隊を論じると言葉に惑わされることが多く、「軍属」といえば日本では「従軍する文官」を指すが、中国では「軍人の家族」である。逆に日本の軍隊用語や武器制式が、中国軍に引き継が

れている。香港返還の直前から全軍に装備が進んでいる五・八m突撃銃は一九九五年制式で「九五式」という。ソ連カラシニコフAK四七の中国生産「五六式」突撃銃は一九五六年制式で、その前の解放戦争の主役は「三八式」歩兵銃とい起原は、なんと日本陸軍の明治三十八年制式である。

中国には内務警察軍として人民武装警察(武警、総兵力とは別計算の七〇万人)があつて陸軍を補充している。しかし日本の海上保安庁のような沿岸警備隊はなく、中国の沿岸領海保全と海難救助は海軍、中国海事局(MSA)、国家海洋局(SOA)、武警水上部隊、そして交通運輸部と、統一管理されていない。日本の海上保安庁は国土交通省の管轄で、有事には海上自衛隊の指揮下に置かれる。北朝鮮の工作船を沈めたのは巡視船だった。このように任務と編制が異なるので単純な比較はできないとはいえ、一国の軍隊はカウンターパワーとして、周辺諸国との対比で説明されるべきと評者は考えている。とくに「建制」(軍隊内部のハイア

ラーキー)を論じるときには比肩が重要で、また階級身分などについては国際標準との対照がありがたい。

本書の構成は文体から穿った見方が、中国で流布する軍事参考書の法令部分と、報道取材の綴れ織りになっているようだ。それが良い点でもあり、またマスコミ特派員ならではの観測のリズムを生み出す。ただ法令に依拠するのであれば、一九頁のように民兵の数を「n/a(不明)」とせずに、国民皆兵を定めた「動員法」を引用して「全人民」とすべきであろう。さらに民兵は職場の人民武装部が管理しており、一部は人民武装警察隊から訓練を受けて、有事には武警に組み込まれるようになっていと書いてほしかった。また二二六頁の大学生の軍事訓練の写真説明では、あえて軍隊の関係大学とする要はない。中国の多くの大学では、就学前に実弾射撃を含む軍事教練を課している。

現用の兵器と装備についてはさらなる論及が欲しくなってしまう。これには自国・ロシア・欧米の規格が混在する武器体

詳しい解説を要するが、それは各論をなすであろう。三五頁のコラム「中国軍艦のネーミング」では、米海軍の情報基準にしている。それについては中国国防部第七院の艦船研究院「現代艦船」一九九八年二月号（当時、国外非公開）に詳細な論文がある。これは評者が中国社会科学院にいて偶然入手した資料なので、著者に落ち度はない。武器裝備について評者は目頃から着目しているが、ここでは説明不足の委細を追及しない。ただ「第二次天安門事件」までの、いわゆる米中蜜月時期に導入された西側軍事技術があり、S七〇ブラックホーク、ヘリコプター、MK四六対潜水艦魚雷、TPQ三七対砲レーダー、LM二五〇〇船用ガスタービンなど、いずれも自衛隊と同じ装備がある。また八〇年代後半に殲撃八II型戦闘機を米グラマン社で性能向上しようとした計画を、本書は「和平珍珠」としているが、一般には「和平典範」と呼ばれている。さらに注目の新型戦闘機「殲撃一〇型（J一〇）」について本書では詳細が不案内である。北京「国

貿橋」の中国航空工業集団公司の前には実寸機体が据えられ、また一月四日から珠海航空ショーでは公開飛行が行われている。エンジンはロシア製で、その他の技術協力国も判明しており性能の推測は難しくない。三八二頁では轟炸六型（H六）爆撃機のペイロード（武器搭載量）を、米B五二の半分とするがそれは内蔵爆弾倉であって、外部搭載量を足せば比較にならない。

中国軍は自己完結体系であるが、不足・欠落部分も多い。大きな装備品では輸送機、偵察機、警戒管制機、揚陸輸送艦などであるが、とくに対潜水艦哨戒機は持っていない（少数の飛行艇はある）。航空母艦については欠けているのではなく「ないものねだり」である。中国軍はいまや軍産複合体で、産業界との連携なしに成立しない。たとえばNORINCO（中国北方重工）は世界に冠たる兵器メーカーである。陸軍装備品は、中国軍よりも強力で高価なものを輸出に向けている。

結論を述べると、これだけ現在の中国

## 現代台湾のエスニシティと政治

沼崎 一郎

本書は、台湾「外省人」（第二次大戦後中国大陸からの移民とその子孫）の国家アイデンティティの現状と未来をテーマに、フランス人政治学者が台湾において中国語で出版した問題提起の書の日本語訳である。著者がパリ政治学院に提出した博士論文を基礎としつつ、台湾の内外で抱かれている「外省人」のイメージを大きく変えることを意図して書かれている。

本書の構成は以下の通りである。

日本語版への序文

序「風和日暖 外省人と国家認同の変容」

によせて 王甫昌

はじめに

第一章 外省人の歴史と政治的背景

第二章 国家という座標軸と外省人の位

置

第三章 アンケート調査とその回答

第四章 外省人のアイデンティティの旅

附録

訳注 湊照宏

解説 何義麟

訳者あとがき

台湾略年表

索引

王甫昌氏の序は原書に寄せられたものであるが、日本語訳では、湊氏による詳しい訳注と、何氏による分析的な解説が新たに追加されている。湊氏の訳注は、台湾に疎遠な読者であっても本書を理解することを可能にしている。さらに、松金公正氏による人間的なコラムも追加されており、初学者には便利であろう。

軍の構造と機能を縦横に書き綴った出版物はなかった。むしろ「網羅」という執筆意図が見え過ぎて、内容がデータベースの色彩を持つことで核心がつかみづらいほどである。全一章に中国軍の総体から兵士の人生まで、隈なく散りばめられている。とくに建制と人事の面は充実している。軍人や兵士の生涯に関わる結婚許可手続きにまで言及しているのには驚く。戸籍と軍籍の関係を明らかにした日本の文献に評者は出くわしておらず、これは農村戸籍と都市戸籍をつなぐ軍人身分にも触れている園田茂人『不平等国家中国』（中公新書、二〇〇八年）を併読されるとうい。

玄関先を人民解放軍が警備するNHK北京支局で取材された「人民解放軍」は待望の良書であり、評者は各位にお勧めしたい。

（注）月刊『航空ファン』（文林堂）に二〇〇七年一月号より毎号二頁を執筆。

（たなべ：よしあき 社会学者）

ステファン・コルクユフ著  
上水流久彦・西村一之訳

台湾外省人の現在

——変容する国家とそのアイデンティティ



四六判 264頁  
風響社 [2625円]

方、何氏の解説は、一篇の論文として、専門研究者にも読み応えのあるものとなっている。

著者コルクユフ氏の目的は、「『外省人』という名称の起源と展開の政治的意義を解釈し、外省人の思想上の論理と国家アイデンティティ形成の多元化への感情について理解すること」（二六頁）である。特に、李登輝總統時代の一連の政治改革が「外省人に胸を潰し骨を砕くような痛み（椎心刺骨）を伴うアイデンティティの危機をもたらしている」（二七頁）という認識の下、「高まる台湾アイデンティティの中で、どのような中華民国ならば、外省人は支持できるかという問題」（三七